

できる事いろいろ
感じ方いろいろ
いっしょにいると楽しい

みんなちがう それがいい

Shiraki Yukiko

白木 由紀子



文芸社

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

できる事いろいろ
感じ方いろいろ
いっしょにいると楽しい

みんなちがう それがいい

Shiraki Yukiko

白木 由紀子

文芸社

はじめに

名古屋市立保育園で、健全児と障害児が一緒に生活する統合保育が始まって二十数年になりました。さくら保育園もそれに近い年数、統合保育を行ってきました。

手探りで始まった統合保育。子ども達が卒園したり、職員も異動したりする中、着実に積み重なった確信が少しずつ持てるようになってきました。

必死に保育してきた当初の二十歳代だった保育士達が、自分自身の子育てを経験した上で、保育園の子ども達と保護者を客観的にゆとりを持って見ることができるようになったのも大きな要因の一つのように思われます。

そんな中、平成九年に知的障害を持ったこうちゃんが入園して来ました。そして十年に自閉症のまあさちゃんと、脳性マヒのしんちゃんが入園して三人を含めた保育が始まりました。

まあさちゃんは三歳児で中度の自閉症児。

こうちゃんは四歳児で重度の知的障害児。(三歳児の時は中度)

しんちゃんは四歳児で中度の脳性マヒ児。

そして十一年は、二歳児だったたけちゃんが三歳児への進級時に、軽度の自閉症児として在園児認定を受けました。

この年、まあさちゃんは保育園生活二年目をむかえ、クラスの一員として楽しい保育園生活のまったただ中、お父さんの仕事の関係でアメリカのカリフォルニアに行くことになりました。とつても寂しい気持ちでしたが、アメリカの障害児教育の中で大きく成長してくれることを願って見送りました。そして平成十二年三月二十五日、こうちゃんとしんちゃんが卒園とともに、四月から養護学校にそれぞれ入学しました。

この平成九年からの三年間のさくら保育園の統合保育を振り返ると、私達職員は今まで経験した統合保育とはまったく違うものを子ども達からいっぱい学ぶことができました。

この経験をただ思い出にするのではなく、私達の宝物として、そしてこれからの統合保育をすすめていく上で少しでも参考になればと思い、この三年間の子ども達の姿をふりかえることにしました。

みんなちがう　それがいい　目次

はじめに 3

第一章　まあさちゃん

出会い 12

入園 13

のぶ君の最初のともだち　まあさちゃん 15

もう一回 16

おしまい 18

まあさちゃん逃げてったよ 20

この指とーまれ 22

別れ 23

(文担当)

園長　白木由紀子

保育士　武藤　陽子

第二章 こうちゃん

出会い 30

入園 31

三歳児 32

保育士 岩田 順子

佐藤 京子

第三章 四歳児になって しんちゃんと共に

担任の混乱 44

オレは泣く（しんちゃんの気持ちになって） 47

トイレ記念日 その一 48

しんちゃんがしんや 49

誰か食べさせて 51

プールでの冒険 53

こままわし 54

一歩前進二歩後退、そして三歩前進 56

お別れ 57

保育士 佐藤 京子

四歳児を受け持って

58

第四章 五歳児になつて

リズム遊び 60

トイレ記念日 その二 62

お散歩 63

水遊びが一番 66

本当のホント 67

プール遊び 69

おいでおいで 75

しんちゃんの誕生日会 76

ボクの三輪車 77

地球が回った 81

最後の運動会 82

三輪車に乗って 89

電車の本と友だち 91

保育士

佐藤 京子
岩田 順子

お客さん大好き(十一月二十五日)

92

遠足 93

せんせー、持って来てー 99

赤ちゃん組のしんや 100

こうちゃんがいてあたりまえ 102

勝利の男神 103

ミュージカル劇場 105

あと一カ月 110

車椅子の経験 111

卒園 112

最後に 115

第五章 たけちゃん

入園 118

三歳児 119

保育士

山田 郁子

石川 かず子

田中 直美

	認定はずし	130
第六章	お母さんから	
	こうちゃんのお母さん	134
	しんちゃんのお母さん	136
	まあさちゃんのお母さん	139
	たけちゃんのお母さん	144
第七章	平成十年度卒園児の保護者から	
	車椅子設置の提案	150
	雑感	151
第八章	アメリカの障害児教育	
	渡米してからの一年間	156
	両親と子どもの権利	165
おわりに		167

本書では、実在の保育園名を仮名の「さくら保育園」としています。

第一章 まあさちやん

出雲

「ピンポン。保育園の玄関のチャイムが鳴りました。」

「こんにちは」とドアを開けたとたん、飛び込んで来た『ちびっこ台風』。

一九九七年十月のことでした。

透き通るような白い肌に茶色のカールの髪。

「わー、可愛い、お人形みたい」そんな第一印象も一瞬のことでした。

靴を脱いだとたん、廊下を走り出し、部屋から部屋へと駆け回るまあさちゃん。今ここにいたと思ったら、もう裸足のまま外に出て、園庭の花を片っ端から摘み取っていました。

よくあれだけ動き回れると感心してしまうほどで、その姿はまるで小さな台風のようでした。

その時は、まさか自分が担任になるとは思わず「来年の三歳児の担任は大変だな」と、心の中でつぶやきながら、まあさちゃんが去った後のおもちゃを片づけていました。

入園

まあさちちゃんは入園前に四回、保育園に遊びに来てくれました。

一回目が一九九七年の十月。二回目が同じく十月の運動会でした。運動会にはほとんどのプログラムに飛び入り参加をしてくれました。三回目が一九九八年の二月、そして四回目が三月の健康診断の日でした。でも、健康診断は走り回って受診できませんでした。

一九九八年三月。まあさちちゃんの入園が決まり、保育体制を考えました。

この年はハンディのある子どもさんはまあさちちゃんを含め三人となり、保育士が一人増えることになりました。

そのお陰で、四月当初はきつと、まあさちちゃんは走り回るだろうと予想し、担任以外の保育士を一人、三歳児につけることができました。

そして迎えた入園。

保育士の心配をよそに、まあさちちゃんは毎日喜んで登園して来ました。

入園前のように走り回ることもなく、蝶を追いかけたり、砂遊びをしたりしていまし

た。でも、いつの間にか、乳児の部屋や遊戯室で一人で遊んでいることが多くなりました。

保育園の中を探索しながら、好きなおもちゃはないか、落ち着く場所はないか探していたようです。それでも、担任が迎えに行くとパニックを起こすこともなく、素直に戻って来ることができました。

三歳児室の中では、牛乳パックで作った長椅子に座って一人で本を見るのが好きでした。

短時間なら、簡単な歌や手遊びを皆と一緒に楽しみました。製作も保育士が側に付くと興味を持って取り組めました。

ただ、誕生会など、行事で全園児が遊戯室に集まると、騒がしいせいか落ち着かず、遊戯室の中を動き回ったり、出て行くことが度々ありました。

それでも、入園前に比べると嘘のような落ち着き方に、担任はまあさちゃんを含めたクラス作りに明るい見通しを感じ、毎日の保育が楽しくなりました。嬉しい誤算でした。

のぶ君の最初のもだち まあさちちゃん

のぶ君もまあさちちゃんと同じ四月に入園した子です。

のぶ君はとつても恥かしがり屋でほとんど喋らず、保育士の語りかけにも首を縦や横に振って返事をするだけでした。いつも、言葉ではなく目で訴える子でした。行動もゆつくりで、一人で三輪車に乗ったり、地面に絵を描いたりするのが好きでした。

自分の気持ちのままに好きな場所に行ったり、やりたいことに向かっていくまあさちちゃんとは対照的なのぶ君でした。

そんなのぶ君とまあさちちゃんが、ある日、廊下の絵本コーナーで頭と頭をくつつけるようにして一冊の絵本を覗き込んでいます。

語り手はのぶ君、聞き手がまあさちちゃんでした。のぶ君はまだ字は読めません。不明瞭な言葉で一生懸命に絵を説明しているのぶ君の真剣な顔。にこにこしながら聞いているまあさちちゃんの顔。

そこには、二人だけの世界がありました。

いつも一人でだまって遊んでいるのぶ君が、友だちに声をかけている姿に保育士はびっくりと同時に、まあさちゃんのはのぶ君の心を開かせる不思議な力、魅力を持っている事を知らされたのでした。

その不思議な力、魅力の正体はまあさちゃんの笑顔？ それとも純真な心？ いずれにしろ私たち保育士は残念ながら持ち合わせていないもののようにでした。
のぶ君が入園して最初の友だち、それは、まあさちゃんでした。

もう一回

夏のプール遊びが終わる頃から、まあさちゃんは友だちの名前を少しずつ覚え、遊びにも加わるようになってきました。まだ順番が守れなかったり、すぐ抜け出したりしながらも、友だちのやることに興味を持ち真似することが増えてきました。

そんなある日「せんせー来て！ こわいよー！」と、まあさちゃんの声。まあさちゃんの姿を探すと、総合遊具の吊り橋に、のぶ君と一緒に立っていました。

様子から察すると、まあさちゃんがのぶ君の後ろを追って登ったものの、その高さに足

がすくんでしまったようです。のぶ君はまあさちゃんのことを気にしながらも、マイペースで渡って行きました。

保育士が急いで吊り橋に登ると「おんぶー」と、まあさちゃんはしがみついて離れませんでした。

クラスの友だちも皆集まって来て不思議そうに、また心配そうに見上げていました。

保育士がおんぶして、一步一步ゆっくり渡り、まあさちゃんを吊り橋から降ろしてほと一息ついた途端、「もう一回」と、頬を紅潮させたまあさちゃん。

怖かったけど渡れた。怖い気持ちより、保育士におんぶされながらも渡れた喜びの方が数倍大きかったです。

二回、三回、四回……。おんぶから少しずつ体を支えるだけへの援助、そして手を握るだけでついに渡れるようになったのです。何回渡ったことでしょう。とうとうその日、一人で渡れるようになったのです。

「友だちと同じことがやりたい」という気持ちを持たせてくれたのぶ君と、ハラハラ心配しながら見守ってくれたクラスの友だち。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

白木 由紀子 (しらき ゆきこ)

1949(昭和24)年2月22日生まれ。

1971(昭和46)年、日本福祉大学社会福祉学部卒。保育園保育士になる。

1973(昭和48)年、名古屋市立保育園保育士になる。

1980(昭和55)年、名古屋市立保育園園長に就任。現在にいたる。

数多くの障害児、健常児達との出会いの中、子ども達そして保護者の方々から統合保育のあり方を教えられたり、応援されたりで、保育そのもののあり方を考えさせられる毎日です。

みんなちがう それがいい

—できる事いろいろ 感じ方いろいろ いっしょにいと楽しい—

2003年9月15日 電子出版発行

著者 白木 由紀子

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Yukiko Shiraki 2003 Corded in Japan

ISBN4-8355-6113-9 C0095

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)